



心に引っ掛かり抜けない骨

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

先日の給食の食材で魚が出たときに、ある子の喉に小骨が引っ掛かり大変な思いをさせてしまったと、担任の指導記録に書かれていました。それを読んでいて、小学生の記憶がよみがえりました。

私が住んでいた住宅の中央には小さな公園があり、そこが子どもたちの集合場所兼遊び場でした。下は保育園・幼稚園の子どもから上は小学校6年生まで、遊び相手がいなければそこに行けば誰かがいて、学年を越えて遊ぶことができました。

その公園の前を、廃品回収の品物を積んだリアカーを引くご高齢の方とそれを後ろから押す小学生ぐらいの子が時々通って行きました。1年中外で働く関係からか、ご高齢の方は真っ黒に日焼けしていて白いタンクトップとのコントラストが今も記憶に深く刻まれています。後を押す少年は、麦わら帽子を深めにかぶり黙々とリアカーを押していました。

私たち悪ガキは、その方たちが公園の前を通る度に差別的なひどい言葉を投げかけていました。ご高齢の方も少年も、それに対しては何も言わず、淡々と重い荷物を運んでいました。少年は公園の前を通るときには、必要以上に麦わら帽子を深くかぶっているような気さえました。

なぜあのような行動をしてしまったのか、当時の記憶は定かではありません。遊び集団の上学年の子が行っていたことを真似していたのかもしれませんが、また、集団と同じ行動をしないといけないという同調圧力を無意識に感じていたのかもしれませんが、さらに、職業に対する差別意識もあったと思います。確かなことは、「自分の頭で考える」という活動を何もしていなかったということです。最悪なことに、私は遊び感覚さえもっていました。

少年は私が通っていた学校から少し離れた資材置き場の一角に、祖父母と住んでいたようでした。家の前には回収品が高く積み、山のようになっていました。学年は多分私の二つ下ぐらいだったと思いますが、学校の中で会うことがなかったことから、隣の学校に通っていたのかもしれませんが、当時の学校でも、道徳の授業は行われていて、「いじめ」については学んでいました。「人権」についてはあまり触れられていなかった気がしますが、きっと学んでいたと思います。

私が行った行為は、絶対に許されるものではありません。稼業を手伝い褒められることはあっても、辱めの言葉を投げかけられる筋合いは毛頭ありません。お二人の当時の心情を慮る度に、心が痛みます。家の用事で出かけたときに資材置き場の前を通ると、すでに更地となり住宅が建ち始めていました。とうとう私は謝罪する機会を失ってしまいました。今も心のどこかに引っ掛かって抜けない骨のように感じています。

前任の港区立筈小学校では、約2割の子どもが外国籍でした。学区域に大使館が数多くあったこともあり、公立学校でありながら、インターナショナルスクール感がありました。年度途中、海外から英語しか話せない子どもの転入も当たり前で、当然、ランドセルなど持っていない子どもも多数いました。生活習慣や文化も異なり、転校二日目にペットボトル片手に登校した子どもに、英語が話せる在校生を通訳として、学校のルールを教えることもありました。学校内にダイバーシティがありました。それを違和感なく認める世界観が醸成されていました。

人と異なることを恐れず、差別することなく、個性を生かす教育こそが、いじめのない学校の基本だと考えています。